

令和4年度「未来を創る学力向上支援事業」に係る
未来を創る授業力向上協議会（小算数）

1 目的

各小学校及び義務教育学校前期課程の教員等を対象に、学習指導要領の趣旨を踏まえた小学校算数の授業改善及び学習評価等に関する説明・講義等を通して、小学校教員の授業力向上に資する。

2 主催 大分県教育委員会

3 期日 令和4年5月24日（火）13:20～16:30

4 場所 コンパルホール（多目的ホール）

5 内容

① 行政説明

「指導と評価の一体化を踏まえた算数科における授業改善」

〈説明者〉大分県教育庁義務教育課 指導主事 田口 昭彦

- 大分県の現状として、授業力のあるベテランの教師が退職し、若手が増えてくる。
- ここ2年間の大分県小学校算数の全国学力・学習状況調査結果は全国平均並み。
計算は全国より上。図形、測定、変化と関係、データの活用は全国より下。
知識・技能は全国より下。思考・判断・表現は全国並み。
- 知識及び技能の確実な習得が必要。
そのために、単元の指導計画をもとに、資質・能力をバランスよく育成していくこと。
授業では、その時間に付けたい資質・能力に即した授業を進めることが必要。
- 問題文や図、表などを読み取る場面で読み取ったことを説明し伝え合う活動を充実させること。
- 「算数が好き」と「算数ができる」の結果に大きな差がある。
→わかるけど好きではない児童がいる。
→主体的な学び（個別最適な学び、自立した学習者の育成）が必要。
- 単元を構造的にとらえ、単元や題材のまとまりの中で「育成を目指す資質・能力」を確実に身に付けるための指導計画を作成する必要がある。

② 協議

「1人1台端末を活用した算数科の実践」

〈進行〉大分県教育庁義務教育課 指導主事 田口 昭彦

〈協議の視点〉

1人1台端末が、算数科の育成を目指す資質・能力を身に付けさせるための効果的な活用について

【A 教諭】

- ・体積の求め方をロイロノートで活用し、全体共有した。
- ・さらに、資質・能力の評価にも活用。
- ・残るから評価もできるし、既習事項の確認の場でも活用できる。

【B 教諭】

- ・5年生のひし形の面積の求め方でロイロノート活用した。
- ・図形領域で大変有効であった。
- ・みんなの考えが聞けて、見えるので有効である。

【C 教諭】

- ・苦手な分野であり、通信の不具合なども不安であり、活用できていない。
- ・タブレットを使うと板書に残らないので積極的には使えない。



③ 講義「学習指導要領の趣旨を踏まえた算数科における学習評価」

<講師> 国立教育政策研究所 教育課程調査官

笠井 健一 氏

はじめに

- 初等教育資料を活用してほしい。
- 1 番年配の人が多いのは秋田県。東京都は若返り。
地方に年齢層によって違う。
- 人間ならでは強みを生かす。
- 主体的に学びに向かう態度：学んだことを学習に活用する。
- これからの算数の授業はハイブリットで。
 - ・ わかりやすく教えて練習させる授業
 - ・ 子どもに考えさせて、考え方を学び合う授業
 - ・ 子どもが発表→他の子どもが説明→他の子どもが説明→わかったか周り確認する授業
 - ・ 教師が説明しない・補足しない授業→主体的・対話的な視点からの授業改善
- 今日の授業は、ねらいが達成できましたか？→できた→良さを共有
できてない→足りなかったところはどこ？
- L字型の体積を求めましょう。
「なぜ、ここでわからなかったのでしょうか。」
 - ・ 自力解決でつまづく児童の困りの把握→説明の場が変わる
 - ・ 児童の説明の後、教師が説明すると子どもは、最初の児童の説明を聞かなくなる。
発表→「すごいね。こういうことだね。」と教師が補足するのは、だめ。
発表→「どういうこと？」次の児童につなげる投げかけをする。次の児童が前に出ていく。
→教師は、みんなが理解するために説明を広げる。
- 発表会で終わらず、教師が説明するのではなく、教師が問い返すことで子どもたちが学び合う授業、つまづいている子どもが「あ！そうか！」とつぶやく授業を目指そう。
- 答えを導く過程が、思考力を育む
自分がわかったではなく、わからない子どもの立場に立ち、その子に教えられるようになってほしい
→「〇〇ちゃんの話でよくわかった。」と言わせたい。
- つまづいている子どもを見つける→この子にどんな説明をしたらいいか
 - ・ 「5分の3リットル+5分の4リットル」は、なんで分母を足さないのか？
 - ・ 子どもは、答えがあっていることを大切にするが、その価値観を変える！
「このクラスに、「5分の3リットル+5分の4リットル」は「10分の7リットル」と思って困っている人がいます。誰かこの図を使ってわかりやすく説明できる人はいませんか？」
 - ・ 説明の後は、「今の説明伝わった？」
「この図ではどうなるか、言える？」
「どういうふうに言ったら伝わるかな？」
→子ども同士の発表だけで、教師が問い返すことで授業を作っていくたい。
- 友達の意見を詳しく説明して理解できるようになる→全国学力・学習状況調査
友だちの考えを理解したり、友だちの考え方で答えを出せるようになっていたりすることが大切である→「より豊かな解決」ができる！
- つまづいている子どもの気持ちに寄り添った授業をしてほしい。
そのためにも、最後に「適用問題で誤答した児童が何人いるか」を確認しておこう。
- 「つまづいている子どもが主役になる授業」それが、「主体的・対話的な授業」である。

